

ごん吉くんしपोर्ट〜南吉よもやま話〜

第18回 ロシア語に訳された南吉童話

皆さん、ベラルーシ共和国をご存知ですか？ロシアとポーランドの間に位置し、ソビエト連邦時代は白ロシアと呼ばれていました。国土の約半分を森が覆い、大小一万を越す湖が点在する美しい国です。

そのベラルーシで、先月、ロシア語版の新美南吉童話集が出版されました。首都ミンスクにある日本文化情報センターの辰巳雅子代表を中心に企画されたもので、五百部発行され、ベラルーシ国内の児童図書館、文化施設、日本語教育施設などに配布されます。

同センターでは、新美南吉生誕百年の2013年から南吉作品をベラルーシ語とロシア語に翻訳し、朗読会を開いたり、出版社に働きかけて雑誌に掲載してもらったりしてきました。そうした地道な紹介を経て、とうとう出版に至ったという訳です。

ベラルーシでは、帝政ロシア時代からロシア語が使われ、都市部

では、むしろロシア語の方がよく話されています。多くの国民がロシア文学に親しんでいて、長い冬をドストエフスキーやチェーホフの長編小説を読んで過ごすのだからです。読書好きは一部のインテリ層だけでなく、子どもの頃から名文や詩の暗誦が求められる社会なのだとか。そんなベラルーシで南吉作品はどう評価されたのでしょうか？

辰巳さんの話では、翻訳した「ごんぎつね」をベラルーシの雑誌編集部の人たちに読んでもらったところ、兵十が病気の母に食べさせようとしたウナギを盗ってしまったごんが「罪」を償う話、つまりキリスト教的贖罪の物語と受け止められたそうです。

また、収録された14編の中には、「百姓の足、坊さんの足」や「和太郎さんと牛」のように、登場人物が酒に酔う場面のある童話は含まれていません。これはロシアと同様、アルコール中毒患者が社会

問題となつていているベラルーシでは、酔っぱらいの出でくる話を子どもに与えるなど論外だからだそうです。

「でんでんむしのかなしみ」に共感する人もいました。南吉には、人間の本质や生き方を問う作品が多くありますが、そうしたところが、ロシア文学を通して哲学的な思考に慣れているベラルーシ人には好感を持って受け取られるようです。チェーホフをはじめ、ロシアの文豪たちの作品をこよなく愛した南吉ですから、「我が意を得たり」というところでしょうか。



全世帯のみなさんへ**配布**します!!

半田市暮らしのいろは帖 2016

市民の暮らしに役立つ情報を提供するため、市役所の窓口や各種手続等の行政情報と地域の生活情報を掲載した「半田市暮らしのいろは帖2016」を発行しました。

市内在住の全世帯の方を対象に順次お配りします。どうぞご活用ください。

問合わせ

◎配布に関すること……半田中央印刷株式会社 ☎29-2525

◎掲載内容に関すること…半田市企画課 ☎84-0603

